

デジタル教科書の導入は「学力低下」を招かないか…

— AI時代の教育は「アナログ回帰」ではなく、「基礎への再投資」—

本誌編集長 佐藤 公 (さとう たかし)

(2026年盛夏号)

「子どもたちの想像力や好奇心を育みたい」

—「こども本の森札幌・北大」オープン—

政府はこの4月、デジタル教科書を正式な教科書とし、検定や無償配布の対象にする関連法案を閣議決定した。

そして、動画やアニメーションなどを組み込んだ「デジタル教科書」を、正式な教科書とする学校教育法などの改正案が6月10日、参院本会議で可決成立した。2030年度から順次、小中高校で使用が始まる。

デジタル教科書の導入は、①「紙のみ」②「紙とデジタルを組み合わせたハイブリッド」③「完全デジタル」の3つの形態から、どの教科書を選択するかを各地の教育委員会などが選ぶことになるという。

導入後、A地域は従来どおり、B地域はデジタル漬けだと、その差が学力の格差になって表れることも懸念されるのである。

これからのAI、スマホ時代、デジタルへの対応力を疎かにできないが、それ二辺倒にならないように、紙の教科書を活用する戦略が必要である。スマホに加え、デジタル端末を見る時

間が増え「デジタル漬け」となる可能性もある。

★スウェーデンの失敗

—「先進国といわれるスウェーデンが、国を挙げて教育のデジタル化を進めはじめたのは2010年代のことだった。ところが、間もなく教育現場から「集中力が続かない」「思考が深まらない」「長文の読み書きが苦手な子が増えた」といった声が上がることになったという。デジタル教育の推進により、子どもの学力低下や集中力不足が深刻化したため、紙の教科書や手書き学習を重視する、紙媒体へ強化する方針に転換した。

なぜ、スウェーデン政府がデジタル教育からアナログ教育へと方針転換したのか。主な理由は

①学力低下、集中力低下、認知負荷の増大②光るスクリーンでの読書は紙に比べて脳への認知負荷が高い。

②記憶定着率の低下③面スクロールがワーキングメモリを消費し、情報の位置を空間的に把握しにくいいため、記憶の定着が

しづらいとされている。

③深い読み込みの阻害④ブルーライトやデバイスの特性が、深い思考を物理的に妨げる可能性がある。

「紙はじっくり読む・保存する」「デジタルは日常の速報・検索用」という役割分担にシフトしていく方向が賢明である。

また、印刷・広告分野の研究では、ウェブ広告全盛の中でも、カタログやDMなど、紙を組み合わせた方が、ウェブ単独より効果的なケースがあると報告されている。

自動車業界でも、広告の露出を「紙・新聞・雑誌」からネットへ移行する傾向にあるが、北欧の「デジタル教科書」の失敗の如くその効果が懸念される。

このことは自動車業界では、欧州メーカーのEVシフト停滞や「EVの急速な一本化」を進めたメーカーが、販売不振や戦略修正に追い込まれた例があり、文明機器の革新だけで踊らせてはならないという学びである。社会の需要やインフラ整備の進度を見極めつつ、人類が長く育んできた文化や価値観との整合を保ちながら、持続可能な形で変化を進めるべきである。紙がデジタルではなく、最適配分、ガソリンがEVではなく、用途別選択なのである。

折しも「こども本の森札幌・北大」がこの8月1日、北大構内にオープンした。

「こども本の森」は、世界的建築家の安藤忠雄さんが設計・建築した図書館で、子どもたちの想像力や好奇心を育みたいという思いで、設計・建築費を自ら負担して自治体などに寄付をしている図書館施設。既に全国で5つの施設が展開されているという。

安藤さんは「様々な情報が簡単に得られるスマートフォン登場は人々から思索にふける時間を奪ってしまいました。こんな時代だからこそ、未来を担う子どもたちには幼いころからたくさん本を読んで、考え、そして悩むことで人生を生き抜く力を養ってもらいたい」とメッセージを送っている。(広報さっぽろ8月号)

AI時代の教育は「アナログ回帰」というよりも、「基礎への再投資」だと位置づけるべきである。紙の「読み書きと対面」という、伝統的な文化(文学、美術など)の継承や、もともと人間的な営みを土台にしたうえで、AIとデジタルは「道具」として位置づけることが重要である。

そして、北欧の失敗の経験は、「技術への信頼が、人間の学び方の知恵を上書きしてはいけない」という教訓である。